誤作動する脳

神埼本館

著者 ◉ **樋口 直美**　発行 ◉ **医学書院**

記憶障害、幻覚、時間意識の低下…。

50歳でレビー小体病の診断を受けた著者が、たびたび誤作動する自身の脳について綴るウェブマガジン『かんかん!』連載を大幅加筆。

推進員の一言

認知症の一種であるレビー小体病は、記憶に関連した側頭葉と、視覚や色彩の情報処理を行う後頭葉に変化が起こることによって、幻覚や記憶障害、時間感覚の衰えなどが生じる病気と言われています。レビー小体病の症状を樋口さん自身の言葉で詳細に書かれています。

認知症になった私が伝えたいこと

脊振分館

著者 ◉ **佐藤 雅彦**　発行 ◉ **大月書店**

「認知症になったら何も分からないという偏見をなくしたい」

51歳の時アルツハイマー病と診断された著者は、心の葛藤、日常生活の困難に対峙しながらも前向きな生き方を模索していく。当事者としての不安や悩み、生活上の障害などを詳しく語り、認知症になっても人生をあきらめる必要はないと強く訴える。

推進員の一言

診断から15年、佐藤さんは今も講演会や公式ホームページなどで「認知症は不便であるけど不幸じゃない」と声を上げ続けています。自分の暮らしを守っていくために、認知症とともに前を向いて生きている佐藤さんの姿は、私たちには何ができるか考えるきっかけになります。

ぼくが前を向いて歩く理由（わけ）
事件、ピック病を超えて、いまを生きる

神埼本館

著者 ◉ **中村 成信**　発行 ◉ **中央法規出版**

1人の行政マンを襲った突然の悲劇。

万引きの現行犯逮捕、それは前頭側頭型認知症（ピック病）の症状によるものだった。混乱、苦悩、偏見のなかで、家族がどのように再生を果たしていったかをつぶさに綴った、感動の手記。

推進員の一言

中村さんに降りかかったピック病とは、脳の司令塔である前頭葉の働きに変化が起こる病気のことで、それによって衝動的な行動をしてしまうという特徴があります。それでも、人々の支えを受けて強く生きる中村さんの姿がこの本に描かれています。

認知症とともに生きる私
「絶望」を「希望」に変えた20年

千代田分館

著者 ◉ **クリスティーン・ブライデン**
訳 | **馬籠久美子**

発行 ◉ **大月書店**

認知症ケアのあり方を変えた、20年の軌跡。

認知症の当事者として発言することで「認知症の人は何もわからない」という偏見を打ち破り、医療やケアの改革に大きく貢献した著者が、20年にわたり世界各地で行った講演を抄録。

推進員の一言

将来への不安と周囲の偏見に苦しみながら、自らの言葉で「絶望」を「希望」に変え、認知症とともに生きてきたクリスティーンさん。認知症の当事者として、これまで行ってきた講演の中で何を思い、何を伝えてきたのか、ぜひ心で感じてください。